



白幡神社

祭神

譽田別命(ほんたわけのみこと)

鎮座地：館山市大戸字白幡二〇二



白幡神社拜殿(上)と拜殿向拝彫刻(下)

由緒

鳥居をくぐり五十段ほどの階段を上ると、彫りの深い端正な顔立ちの狛犬が出迎えます。山裾の傾斜地に、大戸集落を見渡すように小さな社殿が鎮座し、晴れた日には鏡ヶ浦や遠く富士山などの眺望を楽しむ事ができます。

創建は元和四年(一六一八)頃と伝えられ、当時は仮の宮に祭神譽田別命を祭祀し、武神開拓の神として村人たちは御威徳を仰ぎ信仰を集めました。白幡神社というのは、鎌倉鶴岡八幡宮の末社で源頼朝を祀る白旗社を勧請したもので、祭神は本来ならば頼朝なのですが、鶴岡八幡宮の祭神である応神天皇(譽田別命)を白幡神社の祭神にしていることが多く、この地域の鎌倉御家人が鎌倉から分けてきたものと思われま

創建以来、二百六十有余年、仮の宮も再度に渡り改築が行われてきましたが、明治十七年(一八八四)本殿を造営、明治十九年には、住民から向拝の龍、牡丹、唐獅子、千鳥の彫物が献納され、現在の容姿を伝えていきます。龍神は胴は蛇、目は鬼、角は鹿、耳は牛にそれぞれ類似した爬虫類を象徴し、雲や雨を支配する神として、瑞祥のしるしとされています。この向拝の龍は、房州後藤流初代義光の弟子である、北条の後藤正三郎忠明の作です。

地域の自慢

大戸地区では、昭和三十年頃からビニールハウスによるイチゴ栽培が始まりました。昭和三十九年には当時の皇太子ご夫妻が学習院幼稚園に入園された浩宮様をお連れになられ、大戸地区でイチゴ摘みを楽しまれています。現在では地区内の農業者が協力し、「豊房を農業で元気にする会」を結成。田植えや稲刈り、くろ塗り作業、菜花や落花生、芋の収穫など年間を通じた農業体験メニューを用意し、受け入れに取り組み地域活性化に貢献しています。



大正3年製作の大幟



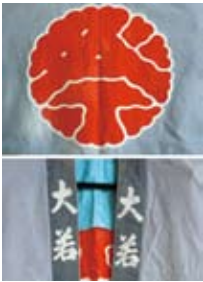
豊房のまつり

祭礼日 十月第二土曜日

豊房地区のお祭りは農村地帯らしく豊年満作を祝う秋祭りです。当地区大戸の白幡神社はもとより、山萩地区の山萩神社、出野尾地区の十二社神社、南条地区の八幡神社、古茂口地区の日枝神社の祭礼は、ともに「豊房のまつり」とよばれています。この五社の中で年番を中心に毎年祭礼の取り決めを行い、例年十月十七日に開催されてきました。近年は、少子高齢化の影響から十月第二土曜日へと移行し、屋台の曳き廻しや神輿の出祭等が行われています。

豊房小学校の運動会では昔から学区内の地区を白・黄・青・赤・緑の五つの組に分けて競っています。これに倣い、祭礼の間、大戸地区は辻々に立つ万燈とともに、地域全体に、繁栄を願い、五色の花飾りで彩られます。また、祭礼前日の宵宮には、曳き廻しこそしませんが

屋台に灯りを灯し、夜に境内にて賑やかにお囃子が行われています。この宵宮も含め祭礼の二日間、神社の左右に位置する山裾に大きな幟幡が揚がります。大正3年に奉納されたこの幟幡には神紋の笹竜胆が染め抜かれており、秋風に泳ぐさまはのどかな風情を感じさせます。自慢の屋台は、稲刈りの終わったコスモスが咲くゆつたりとした里山の中をお囃子の太鼓の音を響かせ、大戸、南条、作名、山萩、古茂口、飯沼、東長田、西長田、出野尾、岡田の計十集落、十四キロメートル余りの順路を十二時間かけて曳き廻されます。



大戸の半纏



豊房のまつり 左から古茂口、大戸、南条の屋台、出野尾の神輿



子どもから老人までが一体となっている大戸地区

このパンフレットは、地域の方々からの聞き取りを中心に、さまざまな文献・史料からの情報を加えて編集しています。内容等につきましてご指摘やご意見等ございましたら、ぜひご連絡いただき、ご教示賜りたくお願いいたします。